

秀 賞



共に歩く

秋田県能代市立東雲中学校

二年 渡 辺 咲 彩

「今、私たちはこうして心身不自由なく過ごしているけれど、生まれてくることは当たり前のように、実は奇跡なんだよ。」

私が幼い頃、母が教えてくれたこと。あときは十分に理解はしていなかった言葉であるが、あのときの言葉の響き、母の表情は幼いながらもしっかりと覚えていた。そして今では、私の生きる支えとなっている言葉である。

私には障害のある双子の弟がいる。生まれたときは何も異常がなかったのだが、退院するにあたり検査を行ったところ、脳に異常があることが分かったのだ。

私は、生まれたときから一緒に過ごしてきた弟なので、歩けなくても弟は弟であると思っていた。ところが、私が五歳になった頃、家族で外出するたびに、周りの人の視線が気になるようになった。

小さい子が車椅子に乗っている姿は目立ってしまうので、どうしても注目を浴びてしまうのかもしれない。初めのうちは両親に、

「あの人、どうしてずっとこっちを見てくるの。」

と尋ねる程度だったが、そのうち、

「みんなこっちを見てくるから、弟と一緒に歩きたくない。」

と、共に歩くことを拒否するようになっていた。

もしかしたら、私が障害のある状態で生まれてきたかもしれないのに。今思うと、弟に対してひどい感情を抱いていたことを恥ずかしく思う。

そんな私に母が教えてくれた言葉。それが、

「今、私たちはこうして心身不自由なく過ごしているけれど、生まれてくることは当たり前のように、実は奇跡なんだよ。」

である。

待望の自分の子どもが障害のある状態で生まれてきたことに、一番心痛めたのは母だったに違いない。そんな母もこの言葉を支えに私たちを育ててきたのだらう。

障害があつて生まれてきた弟は、幼い頃から治療や手術のため、入院生活を何度も送ってきた。現在はリハビリに励む毎日。時に弱音を吐くことはあるけれど、一生懸命に取り組む姿には、我が弟ながら尊敬してしまう。

そして何よりもすごいのは、家族みんなを笑顔にさせてくれることだ。毎日、私たち家族に学校の出来事を話してくれる。テレビが大好きで、自分の好きなスポーツや天気情報を教えてくれる。何に対しても「ありがとう」という言葉を忘れない。

悲しい気持ちや辛い気持ちを数多く乗り越えている弟。私よりもずっとずっと強い心をもっている。自分の障害と向き合いながら、前向きに振る舞う弟を見ていると、自分の日々の悩みなんてちっぽけなものに思えてくる。だから、私は勇気をもらい、弟に負けられないという思いになる。

今日も毎日の弟の日課が始まる。リビングからトイレまでの廊下、約十メートルのほふく前進三往復。弟の足は麻痺のため緊張が強く、自由に曲げることができない。それでも、少しでも足を曲げようとして足をバタバタとさせ、腕の力だけで進んでいく。

「ハアハア。」

息切れしながら、往復が終わったときは全身汗だらけだ。

幼いときは、ほふく前進が嫌で、動きたくないと言張るときがあった。そんなとき、私が「競争しよう。」と喋って一緒にほふく前進したものだ。あ

のときの弟のうれしそうなお笑みが浮かんでくる。そしてそれは今、妹の役目となっている。

弟は自分の障害に不平・不満を言うことなく、一生懸命に生きている。よりよい明日の自分を目指して、日々のリハビリに取り組んでいる。だから、私も負けられない。私自身を大切にしていきたい。

幼い頃、弟と共に歩くことを拒否した私は今、弟の存在に支えられ、弟から勇気をもらうことで前向きに過ごすことができています。弟の存在がなければ、今の私はいなかったかもしれない。

私は生まれてきた奇跡に、そしてかけがえない弟と出会えた奇跡に感謝しながら、これからも共に歩んでいく。弟のほふく前進の歩みは遅くとも、刻む一歩には前向きに生きようとする気概が込められている。私はそんな弟の力強い生き方に負けたくない。負けられないように生きていく。

これが私の挑戦だ。